

Title	巨大な会陰部Epidermal cystの1例
Author(s)	町田, 竜也; 松岡, 陽; 小林, 秀一郎; 尾関, 全; 石坂, 和博; 岡, 輝明
Citation	泌尿器科紀要 (2003), 49(5): 257-259
Issue Date	2003-05
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/114971">http://hdl.handle.net/2433/114971</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## 巨大な会陰部 Epidermal cyst の 1 例

公立学校共済組合関東中央病院泌尿器科 (部長: 石坂和博)

町田 竜也, 松岡 陽\*, 小林秀一郎

尾関 全, 石坂 和博

公立学校共済組合関東中央病院病理部 (部長: 岡 輝明)

岡 輝 明

A CASE OF GIANT PERINEAL EPIDERMAL CYST:  
A CASE REPORT

Tatsuya MACHIDA, You MATSUOKA, Shuichiro KOBAYASHI,

Zen OZEKI and Kazuhiro ISHIZAKA

*From the Department of Urology, Kanto Central Hospital,  
the Mutual Aid Association of Public School Teachers*

Teruaki OKA

*From the Department of Pathology, Kanto Central Hospital,  
the Mutual Aid Association of Public School Teachers*

A 33-year-old man was admitted to our hospital with the chief complaint of a giant perineal mass causing difficulty in walking. Magnetic resonance imaging revealed cystic tumor with a diameter of 13 cm. We performed tumor resection. Histopathological diagnosis of the tumor was epidermal cyst. To our knowledge, this is the sixth case of perineal epidermal cyst reported in Japan.

(Acta Urol. Jpn. 49 : 257-259, 2003)

**Key words:** Epidermal cyst, Perineal tumor

## 緒 言

泌尿器科領域において epidermal cyst (表皮嚢腫) あるいは epidermoid cyst (類表皮嚢腫) はおもに精巣に発生する良性腫瘍として報告されている。一方、会陰部あるいは陰嚢内に発生するものは稀である。今回われわれは会陰部に発生し、歩行困難をきたすまで放置された巨大な会陰部 epidermal cyst を経験したので報告する。

## 症 例

患者: 33歳, 男性, 会社員

主訴: 会陰部腫瘍, 歩行困難

既往歴 家族歴: 特記すべきことなし

現病歴: 4年前より会陰部腫瘍に気付くも放置。徐々に増大し歩行困難, 坐位圧迫での疼痛をきたしたため, 2001年6月14日当科を受診, 7月3日精査加療目的入院となった。

現症: 患者は大学教育を終了しており, 知能に問題はなし。会陰部中央に小児頭大の腫瘍を認めた (Fig.



Fig. 1. The perineum was occupied by a large mass.

1)。表面は平滑, 弾性硬で可動性あり。また陰嚢皮膚および陰嚢内容は異常なく, 精巣および精巣上体は腫瘍とは別に触知した。直腸診上前立腺異常なし。

検査所見: 血算, 血液生化学, 検尿に異常なし。

画像所見: 骨盤部 MRI にて 7×12×13 cm で壁の薄い嚢胞状腫瘍を認めた (Fig. 2)。内部は均一であり, T1 強調像にて低信号, T2 強調像にて高信号を示し, 液体成分と考えられた。また骨盤内への浸潤や尿道, 直腸との交通はなかった。

\* 現: 東京医科歯科大学尿路生殖機能学



Fig. 2. MRI (T1 weighted sagittal image) showed a cystic tumor in the perineum.

以上より会陰部の嚢胞状腫瘍の診断にて、7月4日、腰椎麻酔下に腫瘍摘除術を施行した。

手術所見：会陰部を縦切開して腫瘍表面にて剝離を試みたが、腫瘍壁が脆く一部内容液がこぼれたため、Colles 筋膜に包まれたまま肉様膜下の層面で剝離、一塊として摘除した。また尿道側において球海綿体筋との癒着を認め、栄養血管は同部から流入していた。

摘出標本：重量 815 g. 腫瘍を切開すると薄い腫瘍壁の内腔が白色粥状物質で満たされた嚢腫であった。

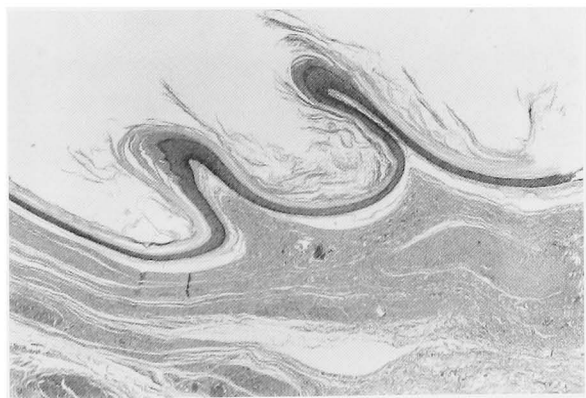


Fig. 3. Microscopic appearance of the epidermal cyst showed squamous epithelium without skin appendages ( $\times 40$ ).

充実性部分、出血、壊死は認められなかった。

病理組織学的所見：内面は角化重層扁平上皮で覆われ、内腔に角化物質を多量に含んでいた (Fig. 3). 皮膚付属器はなく、悪性所見も認められなかったため、epidermal cyst と診断された。

術後の排尿、排便、歩行に問題なく、術後1年経過時点で再発は認められない。

## 考 察

Epidermal cyst は、粥状内容の嚢腫である粉瘤のうち、病理組織学的に正常皮膚と同じ構造をもち皮膚付属器がないものとされ、粉瘤の大半はこれに属するとされる<sup>1)</sup> さらに粉瘤は顆粒層を形成しない外毛根鞘性嚢腫、皮脂腺をもつ脂腺嚢腫とに分類される。一方 epidermal cyst に類する epidermoid cyst は、皮膚表皮以外の組織 (表皮内エクリン腺導管、毛漏斗、脂腺導管)、皮膚以外の組織 (食道、子宮頸部)、その他の上皮組織が扁平上皮化生することにより発生するとされる<sup>2)</sup> 病理組織学的に両者を鑑別することは必ずしも容易ではなく、診断名に混乱が見受けられることがある。自験例は正常皮膚と同じ構造をもつ角化重層扁平上皮で覆われ、皮膚付属器や皮膚以外の組織は認められず、epidermal cyst と診断される。

Epidermal cyst 発生の原因として、先天性の表皮の迷入、エクリン汗腺の閉塞あるいは破壊、陰囊縫線の癒合不全による先天性埋没、外傷による表皮の埋没、teratoma の亜型などがあるが、統一した見解はなく<sup>3)</sup>、まだ結論は出ていない。

発生部位は顔面に多いが、体幹、四肢をはじめ、中枢神経、骨、口腔内、消化器など全身からの発生が報告されている。泌尿器科領域では精巣、陰囊からの発生が報告されているが、会陰部の epidermal cyst はさらに稀で、自験例を含め本邦では6例が報告されているに過ぎない<sup>4-8)</sup> (Table 1). 欧米においては会陰部発生の報告は見当たらない。

会陰部にできる嚢胞状腫瘍の鑑別診断として、胎生期の尿道癒合異常あるいは尿道側管の閉塞による median raphe cyst がある<sup>9)</sup> 自験例では嚢腫は球尿道海綿体筋を挟んで尿道とは離れていた。病理組織学的にも median raphe cyst は扁平上皮がなく、内腔

Table 1. Six cases of perineal epidermal cysts reported in Japan

No.	報告者	年齢	性別	主訴	大きさ (cm)	重さ (g)	治療
1	権ら <sup>8)</sup>	34	男性	会陰部腫瘍増大	12×5×5	130	摘除
2	狩野ら <sup>9)</sup>	43	男性	同上	16×7×5	230	摘除
3	高野ら <sup>10)</sup>	69	男性	同上	7×4	不明	摘除
4	佐藤ら <sup>11)</sup>	54	男性	同上	5×3×2.5	20	摘除
5	長濱ら <sup>12)</sup>	75	男性	同上	23×18×12	1,200	摘除
6	自験例	33	男性	会陰部腫瘍増大、歩行困難	7×12×13	815	摘除

に粘液を満たすなど所見が異なっていた。

診断においては MRI が有効とされており<sup>8,10)</sup> 嚢胞状の形態は正確に描出されていた。またその進展を把握するのにも有効で、自験例でも正確に周囲臓器との関係を把握することが可能であった。手術手順の検討において必要な検査と考えられる。

本邦での会陰部 epidermal cyst の治療としては、いずれも外科的切除が施行され、再発の認められた症例はない。しかしながら会陰部以外の epidermal cyst の報告では、大きいものや急激に増大するもの、経過が長く刺激や感染、炎症が繰り返されているものでは、稀に内腔上皮より有棘細胞癌の発生、転移死亡例もある<sup>11,12)</sup> したがって腫瘍の完全摘除と詳細な病理組織検査が重要であると考えられる。自験例では腫瘍が大きかったが、手術時に浸潤所見はなく完全摘除され、組織学的に悪性像は認めず、術後1年で再発も認めない。

本症例では、腫瘍の自覚から受診まで4年を費やし、腫瘍は歩行困難をきたすまで巨大化していた。精巣腫瘍<sup>13)</sup>、陰茎腫瘍においても、特に高齢者や精神疾患を有する者ではこうした経過が時としてみられるが、自験例は若年者で精神疾患もなく、羞恥心から受診をためらっていたと思われる。何らかの手段により外陰部疾患の受診を躊躇しないよう啓蒙することが必要ではないかと考えさせられる症例であった。

## 結 語

会陰部に発生し、歩行困難をきたすほど巨大化した epidermal cyst の1例を報告した。

本論文の要旨は第549回日本泌尿器科学会東京地方会において報告した。

## 文 献

1) 幸田 弘: 皮膚良性腫瘍—嚢腫について— 日皮

会誌 **98**: 1324-1326, 1988

- 2) Mehregan AH: Cysts related to the adnexa. In: Pinkus Guide to Dermatology. Edited by Kircher JL. 6th ed, pp 595-606, Prentice Hall International Inc, USA, 1995
- 3) 玉田 聡, 和田誠司, 岸本武利, ほか: 陰嚢内に発生した epidermoid cyst の2例. 泌尿紀要 **45**: 285-288, 1999
- 4) 権 乗震, 天谷龍夫, 山本忠男, ほか: 外陰部類表皮嚢胞 epidermoid cyst の2例. 日泌尿会誌 **72**: 1353, 1981
- 5) 狩野宗英, 村上幸人, 上条利幸, ほか: 陰嚢会陰部類表皮嚢胞の1例. 日泌尿会誌 **82**: 1196, 1991
- 6) 高野右嗣, 横川 潔, 並木幹夫, ほか: 会陰部類表皮嚢腫の1例. 西日泌尿 **55**: 1013, 1993
- 7) 佐藤英一, 岡 聖次, 世古宗仁, ほか: 会陰部表皮嚢腫の1例. 西日泌尿 **60**: 42-44, 1998
- 8) 長濱寛二, 眞田俊吾, 三谷恒雄, ほか: 多発性嚢胞腎患者に発生した骨盤腔に進展した巨大な会陰部 epidermal cyst の1例. 泌尿紀要 **47**: 345-348, 2001
- 9) Little JSJ, Keating MA and Rink RC: Median raphe cysts of the genitalia. J Urol **148**: 1872-1873, 1992
- 10) 大口尚基, 川村 博, 松田公志, ほか: 精巣類表皮嚢胞の1例: MRI 所見について. 泌尿紀要 **44**: 747-749, 1998
- 11) Lin CY and Jwo SC: Squamous cell carcinoma arising in an epidermal inclusion cyst. Chang Gung Med J **25**: 279-282, 2002
- 12) 田口秀樹: 巨大な表皮嚢腫より発生し死亡に至った有棘細胞癌の1例. 臨皮 **50**: 967-969, 1996
- 13) 兵地信彦, 山田拓己, 竹内信一, ほか: 陰嚢壊疽を伴った巨大精巣腫瘍の1例. 泌尿紀要 **45**: 237-240, 1997

(Received on October 24, 2002)

(Accepted on January 5, 2003)